SUPERNATURAL

扉を開けて

FANTASY

The Three
possessing supernatural powers
walked through the door
into the Twilight Zone.

新井素子

HEROIC 扉 FANTASY

を開けて

新井素子

CBS・ソニー出版

扉を開けて

一九八二年三月五日　第一刷発行
一九八三年八月二七日　第一四刷発行

著者　新井素子
発行人　切刀良吉
発行所　株式会社CBS・ソニー出版
東京都新宿区市ヶ谷田町一―四　〒一六二
電話　〇三（二六六）五八七一
振替　東京一―六五八二三
印刷所　大日本印刷株式会社
定価　九八〇円

乱丁・落丁本はお取替します。
© 1982 MOTOKO ARAI

3459
ISBN4―7897―0008―9

扉を開けて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

PART I

静かな道を、あたしは歩いていた。うすい灰色、暗褐色、深い緑と混じった白。何とも表現しようのない、暗い色調で統べられた道。いや、道というより、洞窟と言った方が正確なのかな。うねうね続く胎内道。その道は、少ししめって、ところもち柔らかく——本当に何か生き物の胎内のようだった。腸——あるいは、血管。内臓器官。ブーツのかかとが弾きだす規則的な音まで吸いとってしまう。

磁石に引きつけられてる感じだわ。何かに引かれる。引きつけられる……。

あたしは心の中で呟いてみる。声を出すのは少し怖かった——ここには音がないのだから。

たとえ道が細くなろうとも、決して絶えることがないのを、あたしは知っている。この先にあるのだ。あたしが開けねばならない扉。

やがて、駆け足になってくる。さながら磁石の如き吸引力の源に近づいたせいだ。魅かれる力が強くなる。

と、同時にわきあがる恐怖。道が、脈うっている。どっくん、どっくん、どっくん……。目の前を赤い幻が走りさる。血球の群れ。そう、これはきっと血管。あたし、流されている。流されてゆく。心臓に向かって。

異様なことに気づく。これはあたしの血管。何故って、脈うつリズムがあたしの心臓とまるで同じ。動悸が速くなる。それにつれて、道の動きも速くなる。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。あれはあたしの心臓。あたしの血液中に、あたし本体なんて異物が混じって大

丈夫なんだろうか。
扉が見えてくる。大きな厚い大理石の扉。くさび形文字のような模様が彫ってある。
開けなければならない。何故ならあたしは、〝扉を開ける者〟だからだ。
いつも閉じこめてきたでしょ。あたしの声が道にひびく。とっぷり中へ抱え込んでしまった、あたしの生命。あたしの生涯。あたしの宇宙。
開けなければ。扉。外へ。
扉の内側から、言葉が細い糸のようににじみ出てくる。ネリューラ。その単語があたしの体をがんじがらめにして、扉へと近づける。
ネリューラ。扉を開ける者。伝説の女王。
吸引力が強くなればなる程、心の中の抵抗も強まる。嫌だってば。あたしはそっちへ行きたくない。扉を開けることはおろか、それに手すら触れたくない。何故って、外にあるのは危険と——そして、恐怖。うすい緑を地にして、赤でふちどられた漢字が浮かぶ。危険。そして、恐怖。
糸になった言葉を断ち切ろうとして、あたしはもがく。
ネリューラ。おまえは扉を開けねばならない。
根岸美弥子。それがあたしの名前よ。あたし、扉を開ける者なんかじゃない。あたし、扉を開けない。
無音の戦いは激しさを増し、道は大きく波うち、あたしの心臓ははねあがる。
そして結末。
あたしは思いっきり身をよじると、からみつく言葉の糸を断ち切った。きびすを返し走りだす。背の道が溶けてゆく。

走る。走る。走る。

扉に背を向けているのに、何故か、扉が見えた。大理石が透ける。あちら側には、大勢の人がひざまずいている。中央に、青味がかった銀髪の男。彼の右手から、ネリューラという言葉の糸が吐き出される。

何故だ。男が呟くのが聞こえる。何故、扉を開けてくれない。時は満ちているのに。

扉を開ける者。歴史を動かす者。今は十二年に一度、最も魔の月が強くなる年。

目を閉じても、執拗に、その情景は見えてしまう。あたしはそれを無視して、ひたすら走る。

今や道は地震状態と化し、暗い色調は濃さを増していた。暗く。黒く。そして。

そして。

☆

――そして、白い正方形。

あたしは、深く息をつくと、見なれた白い正方形のあつまりを見つめた。はふ。白い正方形の大きな板が構成している、部屋の天井。ベッドに横たわっているあたしの胸は、大きく波打っていた。脈が速い。いつの間にかあたし、すっかり体を丸くしていて。胎児の格好。

たく。何つう精神衛生に悪い夢だ。体を伸ばして深呼吸。あー、気色悪。それも、この夢ばっかり四日連続。たまりませんわ。

……何が、いけないんだろう。こんな夢を見ちゃう訳。夢は願望充足だなんて、ぜえったい、思えない。これじゃ健康そこなうだけよ。

ふん。でも、願望充足ねえ。あたしは扉を開けたがっている……何の？　夢判断なんてやってみるにはあまりに抽象的。……とにかく起きよう。朝だから。

はずみをつけて起きあがる。ぶるっ。マリリン・モンローより下着一枚だけ余計って格好で寝てるから、四月とはいえ毛布から出ると寒いのだ。

顔洗って着替えると、朝刊見ながらトースト二枚、ベーコンエッグとサラダにコーヒーを胃におさめて。一人っきりの食事がさみしいなんて、昔、よく思ったものね。むかあしむかし。もう慣れたわ。どうしようかな。視線が朝刊の上をさまよう。株式欄。今日は月に一度の仕事の日なのよね。だけど……何か気がのらない。

いいや、やめよう。何も満月の日にやんなくたっていいんだ。月齢十六日でも十七日でも、満月期には違いないでしょう。むしろ気がのらないって要素の方、重視しよっと。気がのらない日に無理矢理やっても、きっとあたりゃしないんだから。

さて。仕事やめるっつうと、これから学校行くまで一時間位暇だなあ。こういう時なのよね。ふっと〝むなしさ〟なんて単語が心の中をよぎるの。あたし、本当に、何もできない子なんだもん。土日なんて、暇で暇でしょうがないの。雑誌読むかTV見るかくらいよ、できるのは。クラブはいっていないし、バイトする必要ないし、親友いないし恋人いない。

よそ。こんな阿呆なこと考えんの。

とにかくあたしは深くソファに腰かける。セブンスター一本くわえて。

☆

あたし、根岸美弥子という。通称ねこ。ねぎしみやこの上下をとったペットネーム。身長一六八センチ、二十歳。大学の三年生。都内のマンションに一人暮らし。親のやっかいにはなってない。一応、高校にはいった時から、経済的には自立してる。

とは言っても、別に、両親が死んだ、なんてわけじゃなくて……えーと、何ていうのかな、これは

あたしがいささか特殊なせいで発生した状況なのだ。特殊ってのはつまり、えーとね……特殊なのよ。普通でないの。

何ていうのかなあたし――一番あてはまってる単語使うと――自分って、魔女じゃないかなって思ってる。

魔女。魔法使い。

まず、あたし、思念を集中すれば、未来を時々見ることができる。これを利用して、株の変動、馬券のあたりはずれなんか予見し、生計たててる。

それから。あたしが相手の目を思念を集中して見すえると、その相手は大体あたしの意志どおりに動いてしまう。つまり、他人の精神をあやつれる訳。でも、これ、単にあやつれるってだけで、読めるっていうのと違うからね。

あと。あたしの目は、物を弾くことができる。ものを弾く――よく判んない。一種の念動力みたいなものだと思う。

そういうのは二十世紀において、魔女じゃなくて超能力者って言うって？　でもね、あたしのこの能力は、どういうわけか月の運行に影響されるのだ。満月期を最高として、新月期で人並み。月を守護神とするあたり、どうしても魔女・狼男路線だと思う。

それに。あたしの目は、あたしが力を使う時、緑に変色してしまうのだ（あ、平生は焦茶よ）。この辺も何だか魔女がかってて気味悪い。

でね。あたしが両親と別居しているのは、この能力のせいなの。といってもね、親は、あたしの能力を、はっきりとは知らないと思うんだ。ただ――生まれた時から中学生時代まで一緒にすんでたから――うすうす気づいてるとは思うのね。で、嫌じゃない？　こんな化物みたいな娘と一緒にすむの。

あたしの考えすぎかも知れないけれど——何ていうのかな、カンがしたのよ。このままずっと両親とすんでいたら、いつの日かあたしは、両親にとっておそるべき人間になってしまう。でも、早いうちに別居して、たまに里帰りするって生活してれば、あたしはいつまでも愛娘でいられるんじゃないかなって。

親の方も似たようなこと考えていたんだろうと思う。高校の時、あたしがアパート住まいしたいって言いだしたら、おまえにはその方があっているかも知れないって、簡単に許してくれた。で、今は二ヵ月につき一週間の里帰り、というペースで別居中。

その後は、約一年のペースでアパートを転々として。あたしね、近所づきあいができない人だから。友達にしても何にしても、ワンクッションおかないとつきあえない。けどね、家が近いと、自然にそのワンクッションがなくなっちゃうでしょ。それが困る。だもんでちょくちょくお引っ越し。同様の理由で親友もできない。必要以上に親しくなれば、あたし、その人からはなれちゃうもの。これはもうどうしようもない自己防衛本能。

ただ。大学にはいって安定したのかな、この第13あかねマンションには、もう二年ちょっといついてる。何となく、このマンションとは相性がいいのよね。雰囲気があたしに合うんだろうと思う。ここは以前から、幽霊が出るだの人が消えるだの、変な噂の多いマンションでね、定住する人がほとんどいないの。(はやい話、あたしが引っ越さなくても、まわりがぼろぼろ引っ越してくれる訳)

で、まれに定住する人がいると。これがまた、妙な人ばっかりで。

妙な人。そう。それもあるわ。

このマンションの204号室——隣の部屋のこと——には、あたしのBFがすんでるの。BF(ボーイフレンド)。お友達。あたしの、はじめての、そして今のところ唯一人の、特別の人。おともだち。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

判る？　つまり彼は、あたしがはじめてみつけた仲間なのよ。普通の人間でない人。テレポーター。

☆

どんどんどん。左の壁が三回鳴った。杳だ。あたしはＯＫの合図に、壁を一回けり返す。と、唐突に、部屋の中央部に、人間の輪郭がうかびあがってくる。約五秒たらずで、ぼやけた輪郭は完全に人間型となり、目前に隣人でＢＦで唯一の仲間、斉木杳がつっ立っていた。

「ハイ。今日は早起きね」

「ん……コーヒーいれてくれる」

胸まであるストレートの黒髪、櫛いれてないみたい。ひげもそってないや。うっすらかびみたいな無精ひげ。

「あー、眠」

あたしにコーヒーいれさせといて、杳はソファにどてっと腰かけた。そのままソファに沈みこんで眠っちゃいそう。

「どうしたのよ、こんな朝早く」

「朝早くこないとあんた学校行っちまうだろうが……。たく、大学の朝の授業なんて、自主休講しちまえばいいのに」

じょおっだん。この生活で、学校行くのやめちゃったら、他に何もすることがないじゃない。

「あたし誰かさんと違うもん。お宅のやくざな商売につきあってたら、留年決定よ」

彼はフリーのルポライターやってる。定時に出社する必要のない仕事なんで、いきおい生活はルーズというかいい加減。大抵昼すぎまで寝てる。

「トースト焼こうか」

「お、頼む。ついでにハムエッグか何かついてくると、もう、感激しちまうんだがな」
うっうっ、平凡な朝の会話。いいな、こういうの。変な話だけど、この手の会話、するたびに、あっ、感動……。ついついサービスしたくなる。
「ハムエッグにサラダもおまけしてあげるね」
「いいよ。サラダはパス」
「駄目。どうせ野菜食べてないんでしょうが」
「おふくろみたいなこと言うなよな。どうして女って同じ台詞言うんだろう。杏さん、あんまり煙草吸っちゃ駄目よ。まあ、コーヒー何杯め？　あのね、ミルクいれた方が体にいいの。いい加減暗記しちまうぜ」
「はん。それ、今年はいって何人めの彼女の台詞」
「ん、まだ三人め」
「まだってあなたね、それこそまだ四月よ」
あたしは強制的にハムエッグとサラダの皿と、少し焦げすぎたトーストを彼の前におく。彼はその容姿（何つうのかな、典型的美少年が二十六になっちゃったって奴。黒髪はサラサラストレート、目はすんでて口許は小づくり、鼻筋たかく、背も高く、あくまで細身で比較的女顔、たまに前髪がはらりと額にかかる）のせいか、性格のせいか、月に一度位彼女を変えてる。といっても、ふり方が余程うまいのか、何故か女性に恨まれないっていう得な性分。
「そいで？」
あたしは彼の食事がおわった頃をみはからって、キッチンの椅子をひきずってきて、彼の前に坐った。セブンスターに火をつける。

「デートにいそがしい杏ちゃんが、何だって早起きして、あたしの登校前にいらした訳」
「その〝はるかちゃん〟ってのやめてくれる？　頼むからさ」
彼、斉木家の五男坊なのね。何でも彼のお父さんは、ひどく女の子が欲しかったらしく、長男、次男、三男、四男って続いて男だったもんで、確率にかけても第五子を女と確信してたんだって。で、彼のお母さんが七月生まれで夏香って名なので、五月二日が予定日の子に、春香って名前を用意して待ってたんだって。ところが四月二十九日に生まれた子は、またまた男。お父さんいい加減嫌になって、男名前を考える気にもなれず、春香をそのままひらいて、五男の名前を斉木はるかにしたの。この名前のせいと、持って生まれた女顔のせいで、彼、子供時代ずっとお兄さんに〝はるかちゃん〟って呼ばれて女の子扱いされて育ったそう。だもんで、はるかちゃんって呼ばれると、鳥肌たつんだって。今の名前――斉木杳（はるか）は、ペンネーム。表札に斉木はるかってやっとくと、十中八九女に思われるから。……ま、以上のことを知ってて杏ちゃんとわざと呼んでるあたしもあたしだけどね。
「あのさ、俺、今日、体あいてんの。丸一日。で、あんたの言ってた男、見にいこうかと思ってさ」
「ふふん」
時間割を思い出す。
「今日はね、三限のゼミが桂一郎と一緒。午後二時半すぎに校門のあたりにいてくれる？」
「お宅んとこの学校、三時間めはじまんの二時半すぎなの？　ずいぶん遅いな」
「莫迦ね。三限がおわんのが二時半すぎなの……。今日のゼミ、あたしが発表する番だから、さぼるわけにいかないの。ゼミおわった後で彼お茶にでも誘うから。さりげなく茶店（テン）にでもつけてきて、彼の様子見てよ。果たして彼が〝仲間〟かどうか」
「OK。じゃ、二時半に」

食欲満たしおえたせいか、今度は杏の体が消えるのに、三秒かかんなかった。

☆

学校へ行く道すがら、あたしは桂一郎のことを考えていた。桂一郎――山岸桂一郎。あたしのカンが狂っていなければ、彼は多分二人めの仲間。

どういう種類の超能力者なのかは全然判んない。ただ、彼も、体調と月の運行の間に規則性を持っている。あきらかに。

最初、それに気づいたのは――汚い話で悪いんだけど――彼の体臭のせいだった。

去年、語学が三つ、彼と同じだったのよね。で、去年の夏休みあけ、英語の授業のあとで、一人で茶店にはいったあたしを桂一郎が追ってきた。あたしの前の席に坐って。

「ネコちゃん、今、いい？　あのさ、君……魔女とか吸血鬼とかって、いると思う？」

三つ、どきっとした。

まず、彼の態度。あたし、駄目なの、突然人に話しかけられるのって。まだガードができてないじゃない。くつろいでいる時、脇に人がいるのも駄目。

それから、言われた台詞。魔女。あたし、自分を魔女みたいなもんだと思ってるし……。

あと、におい。何、この人。丸一週間はお風呂にはいってないわね。そんな感じ。

彼は、あたしの表情の変化にまるで気づかず、二の句をついだ。

「それからあの……狼男とか、さ」

「さあ……んっと……」

危険を感じたあたし、思わず口走っちゃった。

「それよか山岸君。あなた、一週間位、お風呂にはいってないんじゃない？」

「あ、ごめん」
桂一郎は律気に身をかわすしぐさをした。
「気をつけてるんだけどね、俺、体臭きつくて。今朝もシャワーあびてきたんだけどね」
嘘お。……いや、もし、それが本当だとしたら。この人、きっと何かの病気だわ。尋常の体臭じゃない。
その後、何かにつけて、あたしは彼の体臭を意識するようになってしまった。その結果、変なことが判ったの。彼の体臭、満月期には異様な程、きつくなる。新月期には、普通の人並み。新月から満月にかけて、月が満ちるとともに体臭もきつくなる。
自分のことは判らないからおくとして、杳の場合、こんなことはない。けど——何かよく判んないけど、彼も月と関係ある人間みたいじゃない。
で、まあ、一週間位前から、杳に出馬を願った訳。あたし一人じゃ確信持てないし、もし桂一郎が仲間だとしても、「あなた、超能力者？」って質問して、素直に「うん」と言うとは思えない。杳は、その特殊能力をいかして、人の家に忍びこみ人の秘密をさぐりだすことができるでしょ。あたしと杳が友達になれたのも、あたしを仲間じゃないかと踏んだ杳が、うちのシャワールームに一週間張りこんだせいだし。

☆

お昼時。あたしは学食で、友人の女の子とカレーライスを食べてた。よもやま話のフルコース付き。彼女は、春休みに行ってきたスキーで足挫き、その話を主にしていた。
「あたし、スキーはじめてだったでしょ。運動神経も悪かったしね。そこへもってきて、間違って上級者用のリフトに乗っちゃったのよね」

いかにして転んだかの状況描写がおわった処で、彼女は、何故転んだかの理由説明にはいっていた。
あたし、適当に返事する。こういう会話、好きなんだ。意味が全然なくて、ガードする必要もなくて、なのに何だか〝おともだち〟の雰囲気、味わえるじゃない。
「要するに、三拍子そろっちゃったのよね。初体験で運痴で分不相応」
と、突然。
「あ……」
思わずうめく。
「ん？　どうかした？」
「ん……ちょっと、頭がね」
痛んだのだ。ふいに。
三拍子そろっちゃった。何だろう、このフレーズ。ひっかかる。
「頭、痛いの？　大丈夫？　……嫌だ、ネコ、まっ青よ」
「そお……」
「すごく顔色悪い。ちょっと待ってね」
彼女は、あたしの額に手をおいた。
「……熱はないみたいね」
「うん。どってことない」
と口ではいったものの。実のところ、どってことないなんてもんじゃなかった。
三拍子そろう。三拍子そろえちゃいけない。
このフレーズが、頭の中をいったり来たりしていた。ずきずきずきずき。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com